

◆祝辞

文化財と木材の保存

理事・京都大学名誉教授 藤井 義久

日本人は、古代から木造の家に住んできました。住居だけでなく、仕事・集い・祈り・政などの建物も木造が大宗をなしてきました。狩猟生活をしてきた縄文時代、稲作が始まった弥生時代の木造を日本人の住居の原点としてみると、その後、朝鮮半島や大陸から様々な文化・文明や建築技術が渡来し、それらがその後の千年以上の期間に変遷し、日本独特の木造に進化したといえます。現在でも日本人の多くは木造の家に住み、古くからの木造の一部は文化財として保存・継承されています。

なぜ、木造だったのか？ 近くに木材を育む森林があり、軽い割に強い、加工しやすい、適度に断熱性がある、軸状の材料で簡単に構造物を構築できる、といった理由を挙げれば、木造建築を軸とする住生活、産業・商業、伝統や文化が、日本人の生活の根幹の一部になった、と考えてよいかと思います。

また木材は本当に良い材料だと思います。ある研究者が、「至高の材料である」と表現されていました。理由は上述の通りなのですが、個々の特性では木材より優れた材料は多々あるのですが、総合的には木材は常に上位に位置するバランスのとれた材料であり、「至高」の真意は、このあたりにあるようです。また木材が、エネルギー集約的に生産される工業製品とは異なり、時間はかかるが自然の中で育まれる材料である、という点も「至高」の由縁かもしれません。

しかし、木材・木造にも弱点はあります。俗にいうヤケ、コケ、クサレと呼ばれる三大弱点がそれで、火災、地震そして生物劣化（蟻害や腐朽）をいかに克服できるかが、文化財建造物だけでなく木造の保存・修理では最優先課題といえます。筆者は、第三の弱点である生物劣化対策に関して、文化財建造物の保存修理に関わってきました。

ところで少し話は複雑になるかもしれませんが、自然界において育まれた材料である木材は、本来きわめて安定的で、通常的环境では簡単には変化（分解）しません。これが長い木造の寿命を裏付ける根拠です。しかし地球上には、結晶化した天然の糖質である木材を餌とし、分解・欠損させる生物（昆虫や菌類）が存在します。これらの生物が木造に「劣化」をもたらし、木材の寿命を、極めて短時間で毀損します。

その一方で、地球規模でみた物質循環（特に炭素）の観点から見ると、これらの生物は欠かすことのできない分解者でもあります。かれらを駆逐することは、技術的にも資源・

環境の保全の観点からみてもあり得ません。ただこれらの天然界の分解者から人工物ではあるものの歴史的・文化的価値のある木造建築をいかに遠ざけるかが、そしてそれを限られた時間と予算の範囲で、いかに実現するかが、保存修理業務に課せられたタスクであると理解しています。誤解を恐れず申し上げれば、分解者と人間とが、どのあたりで折り合いをつけるかが要諦のような気がしています。

江戸末までは、日本人は身近な自然から生活に必要なものの殆どを調達してきました。森林が人間に与えてくれるもの、実はこれはたくさんあります。清らかな空気（酸素）、豊かな水といった環境資源の他に、材料や燃料となる木材、食料となる動植物、繊維質材料、葉などの物質を手仕事で得てきました。

近世から近代・現代になるにつれ、天然林から人工林が発達し、その一方で、大工仕事や運搬仕事の機械化、それらを支えるエネルギーや材料革命などが顕著になりました。それにつれ日本人は森林と疎遠になってきました。また20世紀以降に発達した化学工業は、肥料や農薬に革命的な変化をもたらし、上述の分解者との折り合いのポイントも大きく変化しました。ともあれこの間に生まれた様々な近現代の建築が、やがて文化財として保存修復の対象となるのだと思います。

その一方で、日本人の住生活の基軸が木造であり続け、木造の意義を感じ続ける間は、また木材が信仰や人の感性と馴染み続けている間は、木造の文化財建造物を保存修復する仕事も存在し続けるのだと感じます。

三十数年前に文化財建造物の保存修理の仕事をお手伝いするようになって以来、累計で800回を超える現場調査を行ってきました。時々なぜこんな建築が生まれたのか、なぜこんな木使いをするのか、なぜこんな傷み方をするのか、など現場で感じてきたことを咀嚼し、理解しようとするのですが、答えにたどり着かないこと多数です。「少年老いやすく・・・」を実感しております。

建築研究協会の益々の発展を祈念します。